

韓国式英語の音韻的特徴について

英語学教室 筏 津 成 一

Notes on the Phonological Aspects of the Korean English

Seichi IKADATSU

0. はじめに

「国際化の時代」といわれて既に久しい。特に近年は、「21世紀はアジアの世紀」のスローガンのもとに、アジア諸国間の交流活動に対する関心がとみに高まっている。そしてその中心をなすのが東アジアの日本、中国、韓国の3ヶ国である。最近はその交流活動の領域も政治・経済から始まって文化・教育に至るまで多岐に渡っている。従来、欧米一辺倒であった日本の英語教育・英語英文学の研究者が、近年アジア諸国へ熱い視線を注ぎ始めたのもまさにこうした流れの一環といえるだろう。とりわけ、注目すべきは日韓両国の研究者による相互交流の活発化である。例えば、1993年には第32回大学英語教育学会（JACET）全国大会（於：東北学院大学）において、ソウル大学の朴教授がゲストスピーカーとして『韓国の大学英語教育における傾向と問題点』と題する特別講演を行い、翌1994年には「韓国における英文学研究：回顧と展望——韓国英語英文学会創立40周年記念国際学会」（於：韓国・延世大学）において日本の研究者達が日本の英語英文学研究および英語教育の実態についての現状報告を行っている⁽¹⁾。また、これ以外にも学会支部レベルから大学間レベル、さらには個人レベルに至るまで数多くの活動例が報告されており⁽²⁾、まさに「日韓英語交流花盛り」といった感がある。おそらく、これは10年前には予想だにできなかった状況であり、近年の日韓両国関係の急速な進展ぶりを反映したものとして興味深い。

こうした時流にあつて、筆者も過去数回韓国を訪問し、韓国の英語教育関係者と日韓両国の英語教育事情について意見を交わす機会があつた⁽³⁾。そして彼らの好意により、日本の英語教育関係者が韓国の英語教育事情を理解する上で有益ないくつかの資料・論文等を入手することができた⁽⁴⁾。本小論ではそれらの資料に基づいて、特に韓国語と英語の音韻体系の違い、及びそれに起因する韓国人特有の英語の発音について概観し、併せて日本語の場合と比較検討してみたい。

1. 韓国語と英語の音韻体系の比較

音韻論的にみて、日本語と英語の間に多くの相違点があるのは周知の事実である。このことは韓

国語についても当てはまる。韓国語と英語の音韻体系の主な相違点は次のような点である(申聖澈, 1982, 1989)。

- 1) 英語が音節数とは無関係に強勢がほぼ等間隔に現れる強勢拍言語であるのに対して、韓国語は各音節がほぼ等しい時間をかけて発音される日本語と同じ、いわゆる音節拍言語である。
- 2) 韓国語には側音と鼻音以外には有声子音は存在しない。また、軟子音、帯気音、緊張音以外の無声音も存在しない。
- 3) 英語が9個の摩擦音を持つのに対して韓国語は3個である。
- 4) 英語の帯気音は異音であるのに対して、韓国語では別の音素となる。
- 5) 英語には多くの二重母音があるが、韓国語の母音には純粋な二重母音は存在しない。
- 6) 英語においては音の強勢、高低は弁別素性であるのに対して、韓国語においては、方言において時々異音としての役割を果たすことはあるものの、一般的には特別な弁別素性として機能しない。
- 7) 韓国語には子音群は存在しない。
- 8) 英語においては二重子音の一方は通例、発音されるときに脱落するが韓国語では二重子音は強く発音される。
- 9) 英語の二重母音は韓国語では二音節となる。
- 10) 英語の母音は通例、弛緩音であるのに対して、韓国語の場合は概して緊張音である。
- 11) 韓国語、英語いずれの場合にも、個々の二重母音の「わたり」の調音点の位置の移動がある。英語においては下降二重母音であり、韓国語の場合は上昇二重母音である。
- 12) 英語の強勢のない音節の母音はほとんどいつも /ə/、あるいはごく希には /i/ の、いずれかの音に変化するが、韓国語の場合には母音は常に変化することはない。

このように英語と韓国語の音韻体系はかなり異なっており、類似した音でさえも非常に異なった異音を持つことになる。日本語との比較でいえば、韓国語の音節は基本的に、「子音+母音+(子音)」という組み合わせから成り立っており、日本語と同じ音節拍言語に属している。したがって、英語に見られる'spring' (CCCVC)のような子音群を含む単語の発音においては、日本人と同様に、個々の子音の後に母音をつけ加えて'supringu' (CVCVCVCV)のように発音する傾向がみられる。こうした観点から言えば、韓国語には日本語より多くの音素があり、「パッチム」という独特の子音有声化規則を持つという相違点はあるものの、英語の発音に関する限り両言語はかなり近い環境にあるということができよう。

2. 韓国式発音の実際 (1) —— 音素の欠如による変則発音

英語の一部の音素が韓国語に存在しないことは、韓国人にとって英語の発音の修得がそれだけ困難だということになる。また、音韻規則の違いは、韓国人特有の発音が生まれる原因となっている。具体的にみてみよう。例えば上の3)の摩擦音についてみると、英語の /f, v, θ, ð, z, ʒ/ 等は韓国語には存在しないため、/f/を/p/, /v/を/b/, /θ/を/s/, /ð/を/d/, /z, ʒ/を /j/と発音する傾向にある(権五良, 1990)。まず /f/→/p/ に関して筆者が実際に耳にした例を取り上げてみよう。

	英語式		韓国式
(1) fax	[fæks]	→	[peks]
(2) coffee	[kɔ(:)fi]	→	[kɔpi]
(3) phoenix	[fi:niks]	→	[piniks]

韓国式発音では、一般的に低母音/a/は中母音化して/e/と発音される傾向があり、次の各ペアはそれぞれほぼ同一の発音になる。

- (4) beg - bag → [beg]
 (5) bet - bat → [bet]

したがって、上記(1)においては/f/→/p/, /a/→/e/という音変化が重なって [peks] という発音になっている。また、音の長短は韓国語では弁別素性として機能せず、発音時に特別に意識されることはない。結果的に、英語や日本語では長母音として発音されるものが、韓国語では短母音化する傾向がある⁶⁾。例えば、韓国人にとっては/i/と/i:/, /u/と/u:/, /ɔ/と/ɔ:/の差異が特別に意識されず、次のようなペアは同じように発音されることになる。

- (6) eat [i:t] - it [it] → [it]
 (7) pool [pu:l] - pull [pul] → [pul]
 (8) dawn [dɔ:n] - don [dɔn] → [dɔn]

これによって上記(2), (3)は、母音/ɔ:/と/i:/が韓国式に発音された結果生じたものであることが了解される。ちなみに、(3)は日本語では通常「フェニックス」と表記されているが、下に示すのは筆者が釜山で定宿とするホテルの名刺の実物大コピーである。このカタカナ表記の中に、上で指摘した韓国式発音の特徴をはっきりと認めることができる。



HOTEL PHOENIX
피닉스 호텔
ピニックスホテル

TEL 245-8061~9, RSV 245-3030
 FAX. (051) 241-1523

釜山市 中区 南浦洞5街8-1番地
 8-1, 5-KA, NAMPO-DONG, CHUNG-KU, PUSAN, KOREA
 P.O. BOX 676 PUSAN KOREA.

次に/v/→/b/の例を見てみよう。

(9) TV → TB

日本語の「テレビ」は、韓国語でも「テレビ」あるいは「TV」と呼んでいるが、「TV」は /v/ と /b/ の混同によって、「TB」(ティビ)と発音されている。

次の3例において、(10)では、/θ/→/s/、/ð/→/d/、/v/→/b/、/z/→/j/という4つの音変化が同時に起きている。(11)は/f/→/p/、/θ/→/s/の例であり、(12)は/z/→/j/の例である(例文は権(1990)による)。

(10) I think that is very nice → I *sink dat ij bery* nice.

(11) I'm fine thank you. → I'm *pine, sank* you.

(12) zoo → *Jew*

こうした発音上の特徴は、時としてコミュニケーション・ギャップを引き起こすことがある。例えば、その一つに人名がある。以前、韓国の留学生達との読書会で「サッチャー」という名前が出てきた時に、意外にも、出席していた学生全員がこの人物を知らないと言ったのである。これは筆者にとって大きな驚きであった。「これはイギリスの元首相の M. Thatcher さんだよ」と説明すると、彼らは一様に驚いた様子で「ああ、テ(デ) ッチャー首相ですか!」と叫んで、ようやく納得したのであった。これは 'th' の読み方が韓国式に /t, (d)/ となり⁽⁶⁾、さらに上で述べた /a/→/e/ の母音変化が加わって [d(t)e tʃə] が韓国語に定着した結果であると解釈することができる。

しかし、ここで留意したいのは、コミュニケーション・ギャップを引き起こす多くのケースは、人名とか外来語として韓国語に定着した場合であり、英語のコンテキストでは意識的に英語らしく発音しようとするために、誤解の生じる可能性は低くなっていく。ちなみに、インフォーマントの一人は、上記例文(10) — (12)のうち、(11)の fine → pine の混同はしないと断言していた。しかし、韓国式発音が一般的にこうした傾向性を持っていることは否めない事実である。

最後に、日本人の発音においても絶えず指摘される /r/ と /l/ の区別についてみておこう。韓国語では両者は異なった音素ではなくハングルの子音 ㄹ の異音であり、語頭では /r/ になるから、しばしば次のような混同が起こる(権, 1990, 申, 1982)。

(13) little → *riddle*

(14) light → *right*

また、/r/ と /l/ の差異の区別ができなくて、時には(13)、(14)とは逆に /r/ が /l/ と発音される場合もある。したがって、次のような混同も起きてくる。

(15) the *right lane* ⇔ the *light rain*

しかし一般的に、韓国語では /r/ と /l/ が異音として存在しており、この発音に関しては、韓国人のほうが日本人よりも有利な立場にあると思われる。

3. 韓国式発音の実際(2) —— 韓国語の子音同化規則の影響

韓国語にはいくつかの子音同化の現象がある。その一つに、語末の無声閉鎖音が、後続の語の語頭の鼻音の影響を受けてそれに同化する、というものがある。一例を見てみよう。

(16) 밥 [Pap] + 물 [mul] → 밥-물 [pammul]

韓国語でパツ(プ)は「飯、ご飯」で、ムルは「水」のことである。したがって、パ(ム)ムルは「ご飯を炊くときに入れる水」あるいは「ご飯を炊くときに吹きこぼれる水」のことであるが、ここでは語末の/p/が次の語の/m/に同化して [pammul] という発音になっている。この規則にはいくつかのパターンがあるが、まず、/p, b/ が後続の/m, n/の影響によって/m/に変化する例を見てみよう。(なお、以下の例文は(34)を除いて、すべて李康勲(1971)による)。

- (17) What does "cab" mean? → What does "cam" mean?
 (18) Hang up my coat, please. → Hang um my coat, please.
 (19) a lab notebook → a lam notebook
 (20) Stop now → Stom now

次は、/t, d/が次の語の語頭の/m, n/の影響によって鼻音/n/に同化するタイプである。

- (21) a bad news → a ban news
 (22) Not now → Non now
 (23) Meet my friend → Meen my friend
 (24) What month? → Whan month?

第3の例は閉鎖音/k, g/の場合で、語末の/k, g/という閉鎖音が次の語の語頭の/m, n/と同化して/n/という鼻音に変化している。

- (25) a big mistake → a bing mistake
 (26) a big news → a bing news
 (27) a black market → a blang market
 (28) You make me happy → You maing me happy
 (29) MacMillan → MangMillan

これらの規則以外に、語中あるいは語末において、/n/ が前後の /l, r/ の影響を受けて /l/ に変化するという、別の同化規則がある。

- (30) only → olly
 (31) Henry → Helly

- (32) *full name* → *ful lame*
 (33) He will *not* agree with you. → He will *lot* agree with you.

最後に、/p, k, t/という無声閉鎖音が母音の間に来ると/b, g, d/という有声閉鎖音に変化する現象を見てみよう。例えば、韓国語で「月」は달 [tal] である。これに「新しい」という形容詞새 [se] が前について「新しい月 (すなわち来月)」という意味になるが、/t/の発音は/e/と/a/という二つの母音に挟まれて/d/に変化する。

- (34) *tal* (moon) → *se-dal* (new moon)

英語における実際例を見てみよう。

- (35) *black ink* → *blag ink*
 (36) Whose *book* is this? → Whose *boog* is this?
 (37) a *cup* of tea → a *cub* of tea
 (38) I *get* up at seven. → I *ged* ub at seven

以上、韓国語の音韻変化規則の影響が英語に転移される例を具体的に検討してみた。これらの例文をインフォーマントの韓国人留学生に発音してもらったところ、例文によって程度の差はあるものの、かなりの場合において研究者の指摘する韓国人特有の発音を確認することができた。ここにおいて、従来から指摘されてきた外国語習得における、いわゆる「母国語干渉」の問題が改めてクローズアップされてくる。

4. 結び

ここまで、韓国式英語の音韻的特徴について概観してきたが⁽⁷⁾、これらの特徴は外来語として韓国語の中に定着した単語において、特に顕在化しているように思われる。日本式英語の発音との関係でいえば、(1)長母音の短母音化と(2)低母音の中母音化の二点を指摘することができる。韓国人が欧米人の名前を発音した時に、すぐに理解できない場合が少なくないのは、まさにこれに起因している。以上の観察から、韓国式英語の発音上の特徴は、英語というターゲット・ランゲージとの比較だけではなく、日本語という第三言語のフィルターを通して眺めることによって、より一層鮮明に浮かび上がってくるように思われる。このことは、現在進行中のアジア諸国の英語教育研究者同士の情報交換、あるいは共同研究作業の意義を我々に再認識させるものとして、英語教育関係者がもっと注目してよい事実ではないかと思われる。

注

- (1) 10月21, 22日の2日間開催され、'English Studies in Japan : Past and Present' (山内久明：東京大学)、'A General Survey of English Language Education in Japan' (小池生夫：慶應義塾大学)、'English Studies from Asian Perspectives' (柴谷方良：神戸大学)の三報告がなされた。(ELSJ Newsletter, No.73, 1995, 日

本英文学会発行)

- (2) 例えば、JACET 北海道支部の日韓交流国際パネル・ディスカッション(1993年, 7月24日), 九州大学と韓国・忠南大学との人文科学シンポジウム(1993年10月12日), 日韓英語教育シンポジウム(1994年, 6月30日-7月2日, 於:ソウル大学)などがある。またJACET九州・沖縄支部では1991年に「日・中・韓3ヶ国の大学生の英語力と学習実態に関する総合的研究」プロジェクトを発足させ、1992年10月-11月に日本・中国・韓国において本調査を実施している。
- (3) 筆者は大学の同僚のカナダ人英語教師キップ・ケイツ氏と協力して、1992年より韓国・忠南大学の人文学部・英語英文学科および日語日文学科と鳥取大学との、英語と日本語による文通プログラムを主催してきた。また、相互の大学を訪問する学生交流プログラムを企画し、1993, 94年の8月には鳥取大学生グループを引率して、忠南大学を訪問した。その際に、同大学の英文科および言語センターのスタッフの方々と英語教育についての意見および情報の交換を行うことができた。また筆者は、過去3年間に渡り、文部省の「日本語・日本文化研修プログラム」等による忠南大学からの国費留学生、合計8名の受け入れを行ってきたが、今回、彼らがインフォーマントとして、韓国語および韓国式の英語の発音の確認作業に協力してくれたことをここに記して感謝の意を表したい。
- (4) 鳥取大学・忠南大学学生交流プログラムの忠南大学側コーディネーターとしてプログラム運営に尽力いただき、さらに韓国の英語教育事情に関するご自身の数点の論文を快く提供していただいた、忠南大学・前国際交流部長で韓国英語英文学会・大田忠南支部会長の申聖澈英文科教授ならびに資料収集に尽力いただいた韓国アメリカ学会副会長・朴泳義英文科教授に心から感謝の意を表したい。また、本論文の内容の多くを、申教授そして元忠南大学副教授(現ソウル大学教授)の権五良教授の論考に負っていることを、ここに記しておく。
- (5) なお、これらの現象が同時に起こった典型的な例として「ウォークマン」(walk-man)がある。韓国式発音では [wɔ:k] が [wɔk] へと短母音化し、[man] が [men] へと中母音化して、カタカナ表記をすれば「ウォクメン」といった発音になる。
- (6) この閉鎖音の変化については後述するように、/t/がV/t/Vのように母音に挟まれた時に/d/へ変化するが、日本人の耳には語頭にある場合でも/t/と/d/の中間の発音のように聞こえる。この点についてインフォーマントに確認したところ、特にどちらと意識しないで発音している、という答であった。このことから、両者の違いは非常に微妙なものであると考えられる。
- (7) 本小論では、韓国式アクセントおよびイントネーションの特徴について触れておらず、韓国式英語の音韻的特徴をすべて概観したとは言い難い。その理由は、それらについて論じるだけの十分な資料を収集することができなかったためであり、今後の課題としたい。

参考文献

- 権五良 (Kwon, Oryang), (1990), 「韓国の英語教育と韓国式英語」(本名信行編, 『アジアの英語』第2章, くろしお出版)
- 李康勲 (Lee, Kang-Hoon), (1971) 「英語学習における発音の問題」(『言語教育』, ソウル大学校語学研究所論文集, 第3巻, 第1号)
- 朴 (Park, Nahm-Sheik), (1993), 'Major ELT Issues and Trends With Reference to Korean College and Universities', (The JACET 32nd Annual Convention Program)
- 申聖澈 (Shin, Sung-Chul), (1982), 'Application of Contrastive Analysis in Korean Classrooms' (『英語英文学研究』, No. 21, 韓国英語英文学会忠清支部)
- , (1989), 'The Korean Language from Sociolinguistic Viewpoint and its Contrastive Features with English' (『論文集』, 忠南大学校人文科学研究所, 第16巻, 第1号)
- , (1993), 'The Reorientation of Foreign Language Education' (忠南大学校, 人文科学研究所紀要)

(1995年4月30日受理)